芭蕉翁俳諧集　天

911.3
バ
天

昔のしを連歌誹諧とさかりしあふれく
発句附句とくさりまれ式とありてまた句ば
人のいまのこれいをもち附くるをあいふなりやちかうきま
中むかし連歌北式目いてきて後それ中よりさし
ものことばを誹諧のまちかひと名付けるより
この詩歌連誹とて此道の思ひのことばの
として杖のとはなれたる丈ふる守武宗鑑貞徳

季吟宗因なといふ此道の先達世にあまねくいふ
けれとも数ある句にとなへて連歌の附よりを好し
そは徒に狂言秀句をむねとしけれは更に風雅の
ことわり何となといふ人ゝ實なる古文の法式を
失めしが此道のたゝる頃起時に至りてや
爰に芭蕉翁代々の法をもて来りし正歌の祖
を探て俳諧に古人なしと看破し玉ふ也

正歌誹諧と云きさらし古風の句体にかへて天
無心体の付句をも用ひて誠ある有心体の句をなして
をしめて俳諧乃道をたてさせ玉ひ正風天
和貞室子此流にまては談林誹諧なんと云風体の
余なる事を定めたると之続のをしめより座正風
体にはまるものとそこ風とは俳諧世に
何とも似さる今一三百韻次第の集を知るゝ

うつりかはるへし風体のまことをさしてさる華厳
ならは阿含の時にあたるへし冬日瓢曠野の集は
方等般若の時なるへし猿蓑炭俵の集は法
華涅槃の時にも比すへし上の醍醐味なるへき物なれはさきに
此の道の好士なる蕉翁一代の風体にも数法な
よく深きはいろいろ品流れあることを
しらて思ひ入てかたよりしは一時の風体なり

取つも風雅のまことにはあらすころして此ちをも
いろいろはいふ事に思ひをこめて蕉翁一代の
附句を見んため此度まて撰して凡百七十余章
草廬の什拾とす其家にうつし人にしらさしむ
此句集のうちに一つのねかひ又なしと思はん其人の
いと本意の作なれは今の世諸集に見えたるをも
あつめて五十余章をもて撰えらて後学の

爰に記し侍されし蕉翁在世に於て句は門人にまし
此書為俳諧を考吟胃を増ごと難
まれしかものを語によりて記号をとりよるも
芭蕉翁俳諧集と名ばかりとの事也
安永五年旅のたよりも東山神楽岡の庵に
蝶夢幻阿弥陀仏書

芭蕉翁誹諧集

延宝天和年中

二字返音

あら何ともなやきのふは過てふくと汁　桃青
寒さしさつて足の先まで　信章
居合ぬき霰の玉やみだすらん　信徳
拙者名字は風の又三郎　青

おもひ出は月を何かと池の色　章
あら新作もりわかれて鮒　德
醬油の後は湯きは月すゞし　青
文てなかし小便の声　章
前耳や余所の何やら紀州の者　德
雛は比の旅して伊勢の与茂一　青
尾張なとあはれ（さてこなたへ）と　章
かくせ小判や袖にこかるし　德
よき隙にてふらしらぬ色の源　青

千鐘一まい比え式の寝るを　章
ちるからほひみる一乗寺とく　德
うしの寒て夜雁て肩はく　青
糠汁の見つ此るまいひ暮り　章
雨夜かうそうて鐘鑄の功徳　德
悲てつきの垣こしと秋や悲もん　青
その一体ありうきてやの月　章
花のいろ朱難し孫七多ろ乱　德
川燒佐竹の岸の山ふ紀　青

三字中略

さそな都浄瑠璃小哥はこゝの花　信章
霞とゝ田よ三と化人一形　信徳
春い範笑ふ山よりきこへて　桃青
お笑の滝あたり原あ春日隅と　章
聲耳のうちあやしき流のあはひに　徳
碍よおそりよ何房なる　青
ある口寂しき月よせをなかれ　章

雲よ吹きる　礼今の秋　徳
まりはけ者よ妖のやしよ見へう　青
見ひのきはれ大あ殺しく　章
声鼓うりある夕暮のたゝなるう　徳
門おとしと読く書出し　青
織田殿弟伝むなを松まれし　章
二人の蕃の客人　小性　徳
此馬乃りちきれ流たご花鬼　青
積けや法へきと紙張の母衣　章

[illegible]

まろ山ふし海士よりきて　徳

今えの絵となうて七まとひ　青

いさご路てん水のさはく流をさる　信徳
浪せ上入る大釜よおぬり　桃青
天高の地獄の底へまつさかさんと　信章
隠杖鯉の背よ禅くの　信徳

賦何之誹諧

物の名も蛸や古乃風巾　信徳
仰ふむく流る百余里の春　桃青
峯の雪かのこのまろしの餅初て　信章
子人かれは東風まろるなり　信徳
うつけてもろ人ハ月の落日暮　桃青
水鏡千筋よ何の跡こそ　信章
黒の鬚菰の下葉の猶もあ　信徳
尾花の袖よ鐘あさく　桃青
判ちんけいのなる風の末ふや　信章
末ある山ふし海士よよひ声　信徳
一念の鬼となりて七まとひ　桃青

かくちハ鬼也ん也ハ珠いくしをも　章
殊ふのり浮勢此まもすん上るなり　徳
神のいろきなえこえし盛ぬるき　青
了亀もしと夜の蛙かさやかつても　章
き姥かわの爪添ちんと引込ゆ　徳
背くつま立のひかゝるて髭かくし　青
ちもゐるの本ふまれしする弓箭　章
多ろく凡水風にてよ流す水の月　徳
本踏さら出思ひ行く風の設　青

此梅よ牛も初音と鳴つべし　桃青
ましてや蛙人間の作　信章
ある雨れかるうしやれたる世の中よ　、
酢味噌ましりの野辺の下萌　青
あり鉢よ己み紫ん此すり鉢　、
庭つたくて来る此男松花ゝり　章
脱恋ひらもとのむしし二百月　、
仰立つこ南無くらり月の山　青

ウ

あすかゝて手のとしきたる縁の色　　章
一ッのはあまり何よし此松　　ち
浪路路さらて海の余所にみえて　　章
なよふかゝり鏘ひ聲なる　　ち
さる権左松とふ鷺に権左　　章
森林のたつく風さひしくと　　青
喜の宮京踏子て遠て逃よかり　　章
虫啼まてよむかふ麒麟ぬ　　青
恋の秋露まさとくの道過てよ　　章

吉祥日のこれやとの月　　ち
あつらんの瑞路みゆる山かゝる　　章
雲の嵐乃響くよ似たり　　青

次ニノ又秋ならぬならふしとて疑ハ　　似春
米のくれ浦さし流て月　　四友
沖の石も風ゝ袖まく至るふて　　桃青
足まきつ水らや荷の鳴らん　　、
山下し小菜のみよさつと吹　　吉

ゐ雲かくにまてぬくもゐ　喜

了味淡黄麻子すゝまよ?さく　友

林泉を露もけらは明けく　、

酒人まこ三笠のまこや呼なん　喜

火なみ北斗星まろしつらまつり　喜

万歳の風に儀より列くさ　春

肉宿老ありて白髪の神　喜

志賀巾窓よろつむさし泥や　、

淵深の素水こより投こ

てらちく喜わの露の子をとよ　、

涎のいとよ摂取略綾身　喜

みやまる酒屋つまの物語こ　春

南朔四百八十め米　喜

よし野山ふられて武士の世こ　喜

なきこ浪岩を切くさるの　、

花の庭月の秋嵐秋あはく　喜

青柳よろこき廿歳あかなるら　、

見わたせハ詠れハ見れハ須磨の秋　桃青

桂の帆ばしら十分の月　四友

盃に文を乗たる雁啼く　似春

山は錦ゝ袂よりもさゝあり　、

烏帽子ゆるへて舞ふと人や云　青

うちさみたりし日傭大将　、

海へハ鰤鰍真鯵も鳴のなし　春

萩を帰り家ふして　、

ウ

径花よハおもしろ地ににくい　青

おし隠さ酒く雲あり菊あり　春

金砂子うち拂ふ千代の燈　青

みかき出る御殿の月　春

本織かふ山をしのふ長袴　青

誰か使も来るの麻衣　春

君を思て何を恨くなく鳥　青

哭えんハ余多ふく森林の木かし　春

楊枝をこゝ後の杯たかたもひ　青

長者の千銭君に有ける　、

似舞ぬるあの絵や賑らん　去
麻刈りて笹竹のうら　、
花の香に殿騒ぐ山寺より中使へ　青
ふまれてゐる訳よ化と肌みな　春

錦てうかしこらん石川し　麋塒
暮さら二叔山ふ花　千春
風の松三線乃記をやあけて　卜尺
雨双方雷をかさめて　暁雲
身ようつ木子盞の篠を返しまる　其角
せんし源なく夢月を汲　芭蕉
西韻語くるや浮や北語ををとん　素堂
桧柳の夕へ孫子を抱いて　似春
孫村参じて恋風まを恨みのえ　昨雲

蝶酒籠や鱠をすゝむる　言水
おふくに一ツ子山桜ちる　執筆
柳陰毛塚を回向して通り　挑
袖桶に呑まぬ菫此許れ　青
小海老何ぞ畑を歴きせむ　尺
慄る鷺北堅者を思やるよ　雲
柊梅の精加以より立てと　堂
婿御坊辛殿陸めよ蔵此業鞄　蕉
八寿の月を笑と揮し　角

味噌樽より酉鶴平の寝のさ　水
淀ておのし荘の小女　言
妻露に笑剥鶉杰て入る　青
枯枝に鴉をかゝる人喜　春
蝸牛の足殊子聲なので御濃て　桃青
這句以荘子可見矣　其角
禅骨の力ゐしと笑ける　才麿

志ちく風の恋てもちうしを　楊水
笈に来て新まくら都乙　角
灯心きりし詠なむ月　青
黴雨ゆく麻ヶ山の木のもより　水
羽業の抔さく参えらのゆる　舊
うひそめ画眉を容を作らし　青
蕊桃咏の京法主く夷　角
本枕の包にあのおちをまち　舊
先祖をうんしかる夜陪　水

灯をとらく出世鹿叱也　角
右きかくれかつくり月　青
武士恐母まつしとまてりそ　水
女ちとなるまやうようくいむ　九
梅何しく億の三つとろうみ　青
さくろの楯此月を有ゆる　角
露に轎く且易剔易嶌　卜
紀なしの壹毀恐陶ちあめる　水
異秋をと花と吟らしく呪水き　角

心よくも加ふ所より緑青館の宴　青

二
売人平の塔桃作り合ある村　水

情士挑灯を掲げし職る　九

てしもなりける廿五日の声を冬して　清

血槽(ケツリ)か衣ん猶あきを衣ん　角

あけれ来しもしろい起ていはと　九

囚(ヒト)獄(ヤ)の正(カミ)をとをのくるこしも　水

天帝よ目安をかして奥人あ仰　角

桂鋏掃ニ寄り日星鐘(ネリ)かとしゆ　青

西北揺子風のふ阿まち沈る　水

秋よ紛して取常常の記　九

白(ミロキ)虹紀に孫無き村り送て祭(ル)　青

漁の火紅鯛を射る　角

師魚天の詠め籤この腫を窓　齊

あ原北の濃らる人あを迎(リ)　水

向後きくけ波る北岸ん障を　角

枸杞か初売け泥る白の腕　青

恋人の袂よ似るる加りきへの肌　文

雨をくゞらぬ夜風ちつ雨　九
夕暮を息はりとも　吉
民居あり／＼賑をやさむる　角
笑の木然ら菜此花に睡く　九
ましこ世阿ふぶ始め咲の古さち　文
月つんくる雉ちよ白蝶して　角
鏡にと文を読ろ庭すゞ　吉
旅も小袖と向とあいぬ　水
相撲ま。ゆくる。たどる皇　九

兼ぬ照る大神宮の男拾ろ　吉
幣帛菜つくる諺の角　角
春深さと人稲負鳥といへ坐　其角
一しけ秋京洛露忘ん　文九
月を追て冬ろ烏帽子をる　揚水
笹く徳利をもらぬ十一や　桃青
おもろ原川流菓此菓ふ花　九

旱山泳に鐃さえふるふ　角
夕こゆる笑をかまへてかくれきて　支
楸盗むの聲北嵜をあれ呂よ　水
雨の一声に手伝て歌を詩せける　角
薜蘿庵に柴の戸ちらる戸　九
とひかにうて筆より巻を綴て　水
太切て書物もとこのなしく　支
稀さら債て宮の炉に根深溢る　九
あらしもて勝帳の法の字　角

女の能問るとんへて跡もなく　支
着流し軍に汚てやつれし櫚るも　水
ストントo茶入茄しるる家とも　角
もりあへ波根元の住居月　九
秋の末つのこ咲峨砂と色傳て　水
隣の院は清讀をもとふ　青
気飼介人は花に隠る處　九
子丑の虎を寅卯辰けて　角
渾沌羈は正月て氣に極ふ　青

粉炭しらせと馬鹿さとの山　水
雲のみれ女房に蚊のある舗　角
吉原君をぬきみいさめ　磐
棒軍骨やうふせ死止つて　水
つき臼出念より梓にさし　青
国の色と徳明王也なりま良　磐
摩訶右衛門若奈国に生るも　角
愛を捨子を捨毗盧遮阿毘羅吽　吉
風と旅く風ふやうふく　水

旅の食乞し森覚ふ　角
別のあさく耳に鉢きみ　九
月の秋うしみもろへ此旦夕に　あ
雲諷りしのむ妹が蔵哉　吉
抱いて鏡に影の胸見えよ　九
陰と陽との思ひ見えて瀉　角
小袖のち本梳の帯さしそふ　青
納戸の仲を祢門一外　水
煤掃く礼に周於鯨の瞋　角

やとひ来て翁 蓮根刈て入　九
風にうしきく跡るなき多く　水
菊屋ふるへ 枯尾花をくく　青
懶しきしと骨はるほとくたふる　磨
弟子居刈 新酒と讀く程也　角
禅小僧 ようやく月の清を剃む　青
雷盆ゆるすを続に風　水
菜のく鈴 驛く羊を乞切るる　角
楼ありやらちをつるくとくるるも　九

世よみて家ぞ 秋の夢中　才磨
詠めし月に かの名を買　揚水
気やしも茄子に 菊ありき枯て　桃青
鈍さるすり 海嵐渺り　其角
雪の宮 霙の宿と乞来て　水
蕎種秋の音すよ 影を没る　九
楽やつし 隠きて風流林よ　角
桜あり 机織を落せてあそばし　青

焼しほや女房はせいくらゐを　九
京あかりてある芦ゟ付り　水
青る[illegible]楼の戸格をこち[illegible]　青
かれ中く宿に弟子うむむ　角
髪結は随ん庭ちる花し　水
辛抱唯めの男中々潤まる　九
当月刀ち恋泣め[illegible]起ちり　角
律ゟ[illegible]る[illegible]ゟりら　青
肉よ[illegible]くとんさきの[illegible]　九

米とく青の耳よむ稲ちかゑ　水
桐のゑりて笠子わらく秋し　青
無銭（ムセン）居士を卯き月　角
筆耕（タカワス）[illegible]花付て　水
蕪菜のなこのりくもん　九
后宮やふ入ちふ[illegible]ゟる　角
袂しや上（ウヘ）は[illegible]の桜　青
路中ゟつきさけて被の高踏の男子音　九
桃灯切つて[illegible]のかけろひ　水

風前の角ゆかし力を惜りける　青

花の山ふみ捨しのり　角

雷は谷下にして声更て　水

玄文玄し龍王の国　九

俗のりも鹿鳴の法の庭なるや　角

秋の日は東あ地赤都鄭　青

何を学んで蛤の棘て足へる　九

さるこのくしやし両嚢をとる　水

月を着夕草の葉の作状　青

粟刈ながく童子千代ころ　角

女御鶴のねらひは穀ゑよくと　水

水くさき常磐ぞめる　九

谷かふふ人を思ひておふふ之　角

桃をとろまくく卯の君　青

古家の流衣つまさへなれし　九

いくちの禿倉風の荒る　水

麻の葉ふる出る小餅をわ落て　青

かつく枝さすちる生はらし柑子　角

きく吹て晴き隙と宿月よ　水
明て森待ゆきとこの付添すすめ　九
是夏の今くく様よ夕くれ　角
人形を添て帯をゝ以かし　吉
石白く花の名る風興よ以鐘　九
本も一のなで風と森柳　水

貞享元年

旅寝よし宿は師走の夕月夜　芭蕉
庭さへせはくつもる薄雪　一井
こやしとやんを何かる菓焼て　越人
紙漉をアんて一夜舟あるらん　昌碧
琴持の道に人をつれおひけ　荷兮
ウ
障子明きてあつ聞ゆるとさしたる　楚竹
志もせて此一句ひ隙一ま　東聴

みそかしも蛍比浮ぬくしみぞみる
桜かれてまさかりて附る也さよ
影を銚子の私に似る跳し
麻布を焼ひる後に識画く
蘭をそりこゑんまを祢さセしな
白雨の先に吹かる雷比声
くる此ありらぬ山隠の　石綿
小男鹿の子れ矢を袖に射付させ
飛あかる旧空何て去さてなる月

蕉　井　人　哭　今　升　聰　蓮　人

風にかぢけて花のころ〳〵　公
鶯ハ　猶くやかて逢なり　哭

貞享三寅年

日の影をさえきる露の出おさし　云翁
砌まさゝ哀去年の桐の実　文鱗
雪に村柳見えぬ梅さきて　杉風
酒屋懼に入あひ此月　コ斎
妹の山に来のこぬ乃名るしむ　芳童

炭竈こそ老のこしらへ　枳風
里人の麦ちれの形村より　仙化
早き立ふる弱り乃屋ひとよ　李下
餘まさと三峰をおむ笠きれた　挙白
会津よ相手僧いつくよ利　朱絃
法まし人まま歌の具を学ばん　蚊足
敵よせ来るむら雲のこゑ　千里
有明のかん料むしち烏帽子を落す　芭蕉
うき世の露を宴の見合め　執筆

情ましき君の木槿のちる夜よ　鱗
後住女きぬたうらみし　角
山ふかく響をのむ猿の声かなし　孤
命を甲斐の筏ぞ見よ　枳
法の土我剃髪を埋みけむ　杉
ふりしの記を開く菊の戸　重
笑日よりも車数ある花の外　杉
ばしやして小屋の土も陽炎　化
猫の音のこゝろ寒さ呼ばれ　絃

ちつの外碑て読をよる歌　白
厭もり眠られはる然けり　里
乙は涛眉をかくすらく　蕉
鸚子咲て情よさる宿なりや　松
葉ちけふ風よ矢篦切り入れ　存
くれとく下ゑの抑る梳乱　角
あこ更月夜濃くなる傘　餅
石の戸樋鋳あるの壇よ侍（仁）ちきとるひて　白
我三代濃刀ら川鍛冶　下

永禄ハ今くしき松の風　化
ちら江の内枯黄濃よ取らん　絃
しう趣て沙漂またん部ひ　里
船よ菜の湯の浦あさ浮之　角
篭洗まて人の娘をたつれる　下
う不勤乃書所出ひあふし　松
まつ香焼濃ハ隣する茸の本　蕉
友よ母鰺への拘うもの言葉　化
雨さえを眺めけり都くとう　斎

聞えぬ気なる波瀾の声　白
理不尽な物好き武士の六七騎　里
河へ隔て乃牧の法師撰ぶ　角
鴨の一声しづ日浅月に改めて　鍬
絵馬給る秋の宮に祀なり　下
稲妻乃木の間を花の心をせ　白
つまとて取る野に袋を納め　揚水
人あまた身取物をかつぎけり　盛
雨を包む拾うて今日山の洞

三

誰も武他をと名ある画にかけ　角
京に波ある碑みる水　赤
玉川やおのく六ぶ和にく　蕉
江湖くまく身よ年に来利　化
卯の花も流れ精まじ風もなし　定
竹うつ松も花くさよ峰　水
南もく葛尾の畑枕蔵れ天　不卜
寂と秦をおしこもの月まく　鍬
餘他の構の庵蔵ふをうち合せ　風

執かり罷るし秋のころもて　蕪
鹿の音はものいはぬ人意やつめ　絃
に久妻男此鮓よみし月　卜
苫乃百徒七里をとめて須磨ん　下
伊弱何肉皆気の州つら　水
水車米ねを音ハあらしふて　角
柿あさら理の陰くもと罷ら　蕪
二月の茶釜人とすれるまや　高
嫁待牛の手を日の新　芝

胸あをぬ越の猪を識るも　蕪
杉をひねりぐす茂の刈まし　風
蓬の葉をたくみふせてさゝえ鳴　鱗
木奥所ある山陰なし気　下
田人をやうて体もる気り取　高
萩ちしおす長のつれ何ひ　下
問一時雨と参りきま花を生て　春
うろちかく世は世ハ頭のこのら　絃
三度ふむよしゆし桜かしゆし　化

名

あをしつき葉の露まむ　下

傾城を立ぬきのふ会とし　鱗

孫よみかゝし若川の夏し　重

此海老筆用ひてかゝりて　白

梅まく花を包ひなりゐ　高

村雨に石の灯ゆ吹たりぬ　峡氷

蛸とふ夜の岬は静かに　化

伊勢を月松に船のゆくさき　卜

けやあえりまゝ橋せる秋　下

信長の治まる世や史あん　水

居士と咲そから国の吹ん　鱗

秋に牡丹十里の香を合て　春

雲すむ谷にある湯をきく　水

岩根ふく五月地鶏を花吹　角

笠へや手出若法師と書　高

夕飯恋し船まやつに返歌て　化

簑縫をさま晴月なるのも　重

足川の唐山にそまるさむけよ　水

手なへ唱る阿音　姉は尼　角

舟いくつ涼みの外の川つらひ　風

尾長もまじる杉の白鷺　水

家むしろの七府に紫る花見え　卜

連歌くりくる其之人もなし　白

花咲て七日鶴見る麓哉　芭蕉

懐く謎せんくる翔もし　清風

呈語古銭まろき氷る筏にて　峯白

米一鉢をとゞる宮の戸　曽良

名月を隣る祢宜まくら草枕　コ斎

枝ふくるりま 桐の葉をも刈　其角

墨こぼ縁落にあへる虫のかゝり旅く　凡

肉外の下向静なる名理　白

老てのみ詩歌の徒いふ色もしく　己

一夜涼嬉て残る春哉　蕉

松明に乾る人となる君は征　角

すて拾子の水よちるのみて　風
形くらちらしきぬ歌を世よ旅な　去
さむしの鉢をわらふ山寺　斎
雪るとらつ櫻やさくらよ高くて　白
江のちしめ乃日も白わきす　角
門口に温泉の名をさまれ月もて　蕉
三河やく康此一ツ矢ちと扇子　京
ナ いきくと冨よ氣高う鉛薄　嵐高
胃わうよ此白粉をとめるゑ　風

膝琴よ明の風絃をかすかさる　角
源なうく牡丹ちりて　白
耳うとく妹か告くる本つき沢　蕉
つきかく足袋よ菓庵をしてれ　良
札焼て刀八のうちをつくくる跡　凡
我うつ禮るを殿かさ法琴　角
橘ちらちる枢旅やさしく詠候て　斎
京乃月秋わさそ誦るを　高
首とまく抱やむ人の獨様よ　白

眉ぬきし袖の翠か庵よしつぬ哉　蓮

唐の文よめぬ所とよら庵とて　己

蔥かけれ富津山ちら　高

畿内ちて若菜を摘し破畑　風

何やらなしして捨やめぬらし　蕉

おもかし枝振もしき花と松　菊

車をとうてしくまうのやましく式　句

破風ほふ日ちせやよるゝ夕すゝみ　芭蕉

煮茶蠅避烟　素堂

合歓醒馬上　、

かさなる小田も水落もなり　蕉

月代見金氣　堂

露盤添玉涎　、

張旭のものを書明る醉の中　蕉

憤をたたよふるもしき味　、

摢蒲帶驅儺　堂

ぬぶきころやさかりおふ布施屋　蕉
くろふとぬ首かけよ立る柘の撥　、
乳をのませ袖や何を養なふ　、
舟鉤風早浦　堂
鐘絶日高川　、
蕗もありお菊の涙よよとされて　蕉
めしは燵りぬ暖もり火の気　、
詫は敷三社木　徳
讃使五車項　、

名
花月丈山閑　堂
篠を杖佐野のくくひを　蕉
剪銀鮎一寸　徳
無雨の聯の毛を鷄らん　、
粉日夕けのうらの紅をかくやらし　蕉
風飧唯早乾
よしきつる糸の系ふあつく秋にて　堂
肉をやす火をほす庵の夕月　蕉
露雛韻熟典　徳

霞ノ浦月潸(ナミタリム)写　蕉

蒲萄見て毛夜ほ照る鶉の声　堂

わすれぬ旅乃粒珠と眠さし　蕉

山伏ハ山ヲ草地　堂

門番ハ門ヲ小天　、

鶏鵡窺ニ水鉢ヲ　蕉

それの墨らしく明るそらや春　堂

奥ハ深ま神床の蕭屋ニ花をとんて　蕉

臨ハ谷ニ伴ヲ鮭仙ヲ　堂

はつ秋よしめしよこめし旅のつと　露沾

雁やとな梢もる風の月　芭蕉

山陰よ刈田の穂の飛ひひく　沾遊

武志臣つめし早川の杉　其角

くれのくる雲に流るる泥横ハ(しまた)　西翁

おろさぬ松よ杖肥く松　沾荷

傘の露にかく隠れかくされて　蕉

祭むかへし神山の氏　法

あつまり此所よりて旅の客　旦

またしに此よそかへりける　蓮

ゆきは天のむしばとは　角

埜なある僧よ隠捷せさく　旦

恋にまつ隠倉山の奥ふかし　治

しほる袂よ白き萩風　芭

月清く浦浪ふ三すの味　蓬

あかりきふて鯉てくしやる　角

花咲く人しまる草の庵　旦

家板きう山の花の橋　芦

信濃路やたゝられば芝さへて　治

馨つる又ゐうのつる芝　徳治

橋の葉にも人集い書院　蕉

中よむかし書のさるつ哀　芦

物ゆきい恐ひや花の月晴て　せ

路く浪は萬秋の紅りは　蓬

る秋て紫板のいよる秋の未郷　荷

九福波かさす屋上てる哉　沾

風の音なき蘋のいかめしさ　蓮

大口をあけて庭の雪掃　蕉

しつもなく旅比は小をさす手はなして　沾

三とり小舟を編くゝりすまあ　荷

一軸の記念の連歌僚よ近　ぢ

名よ恥ぬへき其の戦ひ　沾

西のはく陰んてむ千里つ哉　蓬

床階を上る唐獅子の声　ぢ

襤褸織るもの絲みをさわく　蕉

柳のおもふ況ひ入る春　桃子

蹲たの旅ちを抱ゆる夕日哉　沾荷

滋蔭の花の芦の穂のしへ　芭蕉

雲靄の衣縫を隔る松こえて　露沾

当百を陰まる石ハゝの露　岱

八月は萬代継ぐる武者一人　蕉

柴木のかげに乞よ此柴を何やかる　沾

山寺まゐる也狐のさ迷ひへるく　荷

是間きやと酒せつるらし　蕉

夕霧は日くれにかさなる鶏の声　荷

白花蝶の垣をと飛こえて　沾

孫池をと探る栖よ弟らひて　蕉

こゝろしし蛙をホ原かへさし　沾

春へ〳〵の記念の鼓[illegible]　荷

何し焼ん火に眠[illegible]　蕉

様の月一夜の宿く借夜て　荷

塩つまるあしうらに萩分　沾

こゝつくのこゝら秋や帯ぬるん　蕉

四十花こそ風も身すしめ　嵐雪

江戸桜こゝろ通ひてん発し花　濁子

さつき野霧分かへりみる月　芭蕉

貝掻ひくゝ磯なる手きて　嵐雪

砕くるゝ人の肩よりつく　嵐蘭
行水の跡いと西瓜や他人の名　蕉
松杉苗杉揉のこゝろ　子
池の橋みまかしめぬ垣中て　角
漆入る帆のこゆる屋根こし　雪
世の中まて西よの外ゆる畑　子
妹のかしら此度嫁やまし地　蕉
記念て手付ひのきれ乃てまくま　雪
夏に占きく園の秋ゆ　子

津の惣難儀くと拘りて　蕉
二夜ともりの流蛍さかしひ　雪
一巻の連歌と止世ニ死なえ　子
苗代もゆる百こまる都包　雪
謡う此業のいくつの業と見へ逢て　蕉
祢宜もりの夕の夕月　子

芭蕉翁誹諧集　上終

聖和學園短大
第6366號
受入
昭和36.3.14